

風姿花伝第二、物もの学まね条々

老人

老人の物真似まね、此道の大事まねなり。能のの位くら、即やがて、余所よそ目に現あらはるゝ事なれば、これ第一の大事なり。凡およそ能のを良よき程究きはめたる為して手ても、老すがたたる姿すがた得ねぬ人ひと多多くし。たとへば、賤いやしき物真似まねの、わざ

〔口訳〕

老人の物真似は、能樂道に於ては、誠に重大事である。何故かといへば、其の演者の芸位が、老人に扮すると、直ちに見物の眼にあざやかに知れるものであるからである。一体に、能を相当な程度にまで究めた役者でも、老人の姿の不十分な者が多い。一例をとつて言へば、身分卑しい老人の物真似で、伎の多い老体などは、大体に年寄りらしくしとやかにふるまへばそれが良いので、さして大事なものではないが、冠直衣とか、烏帽子狩衣といったやうな、高貴な老体に扮する時には、その

又、花なくば、面白き事
あるまじ。若し人の立ち振ふ
る舞ひ、老いぬればとて、
腰膝を屈め、身を約むれ
ば、花失せて古様に見ゆる
なり。さる程に面白き所稀

物なんどの翁形は、大かた、
老々として閑雅なれば、さ
のみ大事なし。冠直衣、烏
帽子狩絹の老人の姿、人体
気高からでは賤なり。相応
すべからず。稽古の劫入て、
位上らでは、似合ふべから

人体が気高く見えなければ、如何に
も卑しく見えて、一向に相応しくない
ものである。（宗節本では、「たとへば、
木こり・塩汲みのわざなどをする老体
を、相當に演ずると、すぐに上手な役
者だと批判するが、それは間違つて居
るのであつて、冠直衣や鳥帽子狩衣な
どの高貴な老人に扮することは、道を
きはめた上手でなくては似合ふべくも
ないものである。」となる）。かやうな
高貴な老体は、長年の稽古の効をつん
で、芸位が上つたうへでなくては、到底
やれるものではない。

又老人の物真似に於て、花が欠けては全く面白い事はない。一体、老人の立ちふるまひに於て、如何に老人だからといつても、腰膝をかがめ、身体を縮めては、花といふものはなくなり、昔風な演出になつてしまふ。従つて面白い所は極めて乏しい。老人の物真似は、大体に於て、はしたなさを十分につつしんで、しとやかに立ちふるまふやうにすべきである。殊に老人の舞の風情は、無上の重大事である。「花は

なり。たゞ大方、如何にも

くそぢろにて、閑やかに

立ち振る舞ふべし。殊更老

人の舞い懸かり、無上の大

事なり。花は有りて、年寄

りと見ゆる公案、精しく習

ふべし。たゞ老木に花の咲

かんが如し。

〔評〕

老人の物真似に於て特に強調せられて居る所は、芸位、花との二つである。女体に於て強調された所が、扮態の要所であつたのと比べる時、老人に於けるこの二つの注意は、心して味はふべき所だと思ふ。

芸の品位は、特に高貴な老体に於て要求せられる。芸位上達の士でなくては演じ切れない所に、老人物のむづかしさがある。「神舞の閑全

あつて、しかも年寄と見える公案」を十分にくはしく習はねばならない。一言以ていへば、正に「老木に花の咲いだやうにする」にある。

なるよそほひは、老体の用風より出づ」とは、至花道書二曲三体の条に説く所である。現在に於ても、老松などの位は、名人でなくては、十分に出せるものでないといはれる。

次に「花」であるが、これも老体にはむづかしい。いやにくすんだ老人となつては、芸の面白さなどがあらはれさうもない。老人の花を如何に出すか。この解答は別紙口伝にゆづるが、とにかく老人心理の特性にまで切り込んでゐる所は、老人の物真似が、初心未熟の者に不可能である半面をよく物語るものだと思ふ。後年の述作である二曲三体

絵図には老体について、「老体、閑心遠目。(次に老人裸形の図を示して)是は衣裳を整へて良かるべき其體也。この人体をよくよく心見しんけんして立ふるまふべし。花鏡云『先其物能成、後其態能似』是也。忘るべからず。」「老舞。此風ことに大事也。体は閑全にて遊風をなす所、老木に花の開んが如し。閑心を舞風に連続すべし。老尼、老女、同シ。神差かんさび、閑全ノ用風ノ出所」と記されて居る。相互に参照して見るべきであらう。後者は、簡にして深、よく老体の骨髓を説き得てゐるではないか。